

「はじめに」

二〇二一年、私達人類にとって大きな転換を迎えた年でした。

COVID-19。世界を飲み込んだパンデミックの影響は今も続いています。

命を奪う形の見えない脅威に恐れ、先の見えない将来に不安に駆られ、人と人との交流が絶たれました。

家族や従業員の安全、事業の縮小・停止、撤退。影響は人々の価値観を変え、世界を分断させました。

皆さんも、それぞれが様々なことを感じ考え思いを馳せた年だったのではないのでしょうか。その中で、私達の活動も例外ではなく大幅に制限されました。

経営者団体であるが故に本業の立て直しや影響を最小限に抑えるために、長瀬理事長は活動を非対面に切り替える決断を下しました。

しかしその中でもあっても、遠距離の会員の為に検討したWebを活用したり、モートでの取り組みが花を咲かせました。

逆境下でも私達は奮闘し力に変えて、新しい年を迎えました。

しかしその中でもあっても、遠距離の会員の為に検討したWebを活用したり、モートでの取り組みが花を咲かせました。

逆境下でも私達は奮闘し力に変えて、新しい年を迎えました。

二〇二一年度のスローガンは「逆境を力に」です。

先行きが不透明な世界の中で私達は生きていきます。

この不確実な時代に生き残っていくには、私達にとって何が必要なのでしょう

うか？

「昭島青年経営者クラブ（A-I）」

「昭島青年経営者クラブ（A-I）」

私が理事長を務めるにあたり、先輩方の足跡を知る為、かわら版を開きました。

から版とは昭和四十九年に発行した会報誌です。毎月発行を続けており、二〇二一年一月にて五六三号になります。

当初は手書きで先輩方々の温もりある筆跡からは、A-Iや本業への熱い想い、家庭の話、例会の事業紹介等、A-Iの記録が残っています。さらには当会の規約改正の変遷も読み取れました。

当会は一九六四年、東京オリンピックが開催された年に生まれました。

当時の名称は昭島工業ジュニアクラブ。次世代を担う工業地域の若手経営者の会として発足し、

五十七年の月日が経ちました。チャーターメンバーには卒業を迎えられる先輩もいらつしやいます。

私達は世界や全国組織でもなく、この昭島にしかない稀有な団体です。母体もなく、頼るものはありません。あるのは志のみ。運営も全て会員自ら行っています。

そして五十七年の歴史の中で多くの卒業生を輩出し、様々なステージで活躍をされています。

なぜ任意の団体が五十七年も継続できているのか？

私の答えは会の目的である綱領だと考えます。

【綱領】

我々A-Iは

企業のリーダーとして、正しい行動力を生命に、英知と正義を性として、自己をみがき

よりよい社会の建設に努めよう

定められました。

A-Iとはどのような団体であるべきなのか。羅針盤としてチャーターメン

バーの先輩方が記した綱領。

この綱領を旗印に、同志が集まり、会のDNAが形成されていったのではないかと考えます。

目的なき団体は存続することは難しい。A-Iの理念・理想・大義すべてが詰まった綱領の下に先輩方々は数々の事業を行ってききました。

〇くじら祭。九代目穂積忠実理事長時代、昭島をあなたのふるさとに。をスローガンに開催を実現。

〇ハンガリー交響楽団を招請し、演奏会の開催。文化事業への挑戦。

〇市長を交えた討論会。議員の方も会員として在籍した時代。

〇昭島の枠を超えた他団体との交流。設立時に交流のあった栃木青年工業クラブ。友好都市である岩手県岩手町の農村青年クラブ。設立五〇周年を迎える山梨青年工業会等。

〇二〇〇四年から続く、くじらピールの企画販売。

〇講演会・セミナーを開催（共催）櫻井よしこ氏・毛利衛氏・渡辺美紀氏・松野明美氏。多様な講師陣を招く。

〇家族の支えに感謝を込めて、家族会を毎年開催（フロバー事業）。

骨太な経営者が多かった創業期。内部統制が整ってきた熟成期。会員も五〇

名を超え、外部へと活動の幅を広げた

拡大期。時に挑戦を中心、時に新たな事業への挑戦や拡大へ。二世会員が生まれ、上場企業が生まれ、幹部候補が入会する組織に。時の理事長が時代の流れを読み、運営を続けてきました。

実は当会の活動の中心となる部会・室・委員会名は五十七年の歴史の中で、大きな変化はありません。

経営者の資質の向上を図る部会、地域をヒントに新たな魅力を発見する部会、会報誌を中心に活動する室会。くじら祭を運営する委員会。人間の本质が変わらないように、経営者・企業のリーダーとしての本質も変わることがない、容易には変えようがないアイデンティティが組織名に表れています。

二〇二一年度は、組織としての増強を図り、在籍年数が浅い私達がA-Iへの理解を深める年にします。

なお部会名は創業期からの名前を引用しました。

〇経営研究部会：当会の目的である経営者の資質の向上へストレートにアプローチします。

〇地域開発部会：地域をキーワードに魅力を発見、先輩方が開拓した過去の例会を再構築します。

〇広報室：かわら版等を活用し、現役会員にA-Iイズムの浸透を図ります。

〇くじら祭実行委員会：過去の記録を重ね、着実に運用できる体制を整えます。

〇反面、数々の事業は生まれては辞められ消えていきます。しかし先輩方は事業運営から学び、自社に持ち帰って実践されています。

社内運動会を開催。社内報の発行、事業提案書や議事録を他団体に取入れて活動している。それぞれの先輩方が活動を通して学び、自社の会社や他団体で実践している。新たなステージに飛び出したと考えます。

た。経営者・企業のリーダーとして

の成長は、目先の利益だけを追いかけ

ていては自身の成長は限られてしま

うでしょう。役はやり得。大事な事は

「現役の私達に必要なことは？」

私は二〇一五年に入会しました。個人

事業主と会社員の肩書を持つ私は漠然

と現在の環境に疑問を感じていました。

また、同じ業界内だけに通用する技術やスキルを磨く日常に、明るい未来を想像できず危機感も持っていました。

そこで自身の可能性の幅を広げる為に、A-Iの門を叩きました。

そして活動を通して人は人の間でしか成長できないものだと思身をもって体験しました。

仕事を終えた後から始まる会議、その後の懇親会。日中、仕事の合間をぬっての活動。一年ごとに役職が変わり立場も変わっていく組織。

例会を成功させようと献身的で楽しく活動をされる一方、従業員の前では話せない資金繰りや人事の悩みを語り合う先輩方々の背中を垣間見ました。

な。と同時に、何かが私自身には足りない気が付きました。

会では役員を与えられます。特に部長、室長、委員長には例会を企画運営する責任があります。

開催趣旨は当会の目的と相違はないか、事業を実現させる手段・予算は適切なのか、会員の為になるものなのか。また、部長室委員会に所属するメンバーには出席が求められます。

しかし大人になると打算的な考えも働きます。活動が自身に自社に利益をもたらすのか？仕事に直結するのか？即効性ある成果を求めます。ある意味もつともな考え方だと思えます。

ただ、経営者・企業のリーダーとして

の成長は、目先の利益だけを追いかけ

ていては自身の成長は限られてしま

うでしょう。役はやり得。大事な事は

逆境を力に